[氏　名]　長谷川　真之

[出身都道府県]　富山県

[卒業期]　30 期（平成 19 年度卒）

僻地勤務について思うこと

僕は医者になって最初の 2 年間を富山県立中央病院で学んだ。スーパーローテートの時代であり、産婦人科や精神科、麻酔科などを含む多くの知識と技術を学ぶことが出来た。その反面、それは非常に浅いものであった。しかし、短期間であったにせよ、多くの上司と discussion を交え、教科書を見返し、考察した経験は、今後の将来にとって何らかの価値を見出す。そう信じて研修をしてきたし、事実そうであった。すなわち、僻地診療における想定外の問題はある日突然やってくるわけなのだから、「食わず嫌い」で興味のあることしか学ぼうとしなければ、患者に不利益を被ることになる。

ここまで偉そうに話しているが、実際の自分は大した医者ではなかった。内科医が不足したため、3 年目から内科をしながら、週に一度整形外科として研修を積んだ。つまり、僻地診療のために全科を網羅し、地域医療に貢献しようという意気込

☆医学部卒業生の相談窓口☆
自治医科大学 地域医療推進課
TEL0285-58-7055　E-mail:chisui@jichi.ac.jp

みはすぐに消えていた。しかし、それもそうである。富山には島はなく山奥の一人診療所に義務年限内に１年間だけ行くだけで良いからである。その１年のために、この先の未来、例えば自分が今後目指すマイクロ外傷整形外科医としての夢を壊すわけにはいかない。その通過点であると若い医者なら思うであろう。

事実、僻地診療において必要であったことは、内科管理、救急対応、そして全身的医療である。正直、知識は１週間あればつけることができる。だから、その場ですぐ対応を要する救急管理が必須である。あとは、とても点滴が上手な看護師さんが通常配属されているので、最低限問題はない。あとはその村の行事に積極的に参加することだろう。僕は６年目で勤務した。人間としても医師としても経験不足であるが、村民もそこまで望んでいない。自分が飲む薬を下山しなくても出してもらえる、家まで診にきてくれる、それだけで満足してくれる。自分としては、力不足を否めず悔しい経験もしたが、大なり小なりどんな医師にも失敗はある。

そして、一つだけどうしても伝えておきたいのは、僻地診療は楽しいものでも感動的なものでも何でもなかったが、人生でおよそ一度しか経験できない貴重なものであった。家族が許してくれるなら、もう一度行きたい。そして、今ならもう少し村民の力になれたかもしれない。

☆医学部卒業生の相談窓口☆
自治医科大学 地域医療推進課
TEL0285-58-7055　E-mail:chisui@jichi.ac.jp